

平成 21 年 4 月 14 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18530373

研究課題名（和文） タイ・クイ人の家族と村落に関する基礎的研究

研究課題名（英文） Basic Research on Families and Villages of Kuy People

研究代表者 佐藤 康行 (SATO YASUYUKI)

新潟大学・人文社会・教育科学系・教授

研究者番号：40170790

## 研究成果の概要：

クイ人の家族に関しては先祖祭祀が天霊信仰と関係なく自然霊とのみ関係していた。その点で、先祖祭祀がタイ人やラーオ人、クメール人と異なっていた。村落の形成に関しては、タイ人やクメール人たちのそれと相違はなかったが、それらの民族ほど生活は豊かではなかった。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	600,000	0	600,000
2007 年度	600,000	180,000	780,000
2008 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	360,000	2,160,000

研究分野： 社会学

科研費の分科・細目：地域社会・村落・都市

キーワード： クイ人・東北タイ・農村・村落・家族・宗教

## 1. 研究開始当初の背景

クイ人はタイ東北部の南部のほか、カンボジアとラオス、ヴェトナムなどに居住している。ここでは、タイのクイ人を含む研究について取り上げる。

現在、確認できる研究はいちばん古い文献は、サイデンファーデンがカンボジアとタイにいるクイ人について歴史的に概説したものである (Seidenfaden, 1952, "The Kuy People of Cambodia and Siam", *The Journal of Siam Society*, 39 (2))。これがいちばん古い研究であるが、内容は歴史的概説であるため、現在の時点の調査研究ではない。その後 1970 年にタイの少数民族について分布および概説した本がでている。Schrock

Joann et als., *Minority Groups in Thailand: Ethnographic Study Series*, Department of the Army である。この本にはクイ人も含まれている。それ以外には、地元のタイのスリン県に住むクイ人の象使い村の研究が、1980 年代に一部のタイ人研究者と野中耕一氏などによってなされたにすぎない。その成果は、チューン・シーサワット、野中耕一訳、『象と生きるスワイ族』(燦燦社、1991 年)として著されている。しかし、これはあくまで象使いのしかたやわざを中心に資料が収集され記述されたものである。これ以外には、スリン師範大学の外国人教師の Roger H. Salmela が *The Spirit of the Kuy(Suai)* を 1980 年に書いている。現在、スリン地域総

合大学の学長をしているアーチャー氏らが著した *Pha mai nai withi chiwit thai kui lae thai khmer*, n.d. がある。これは絹織物を広く調べて紹介したものである。

そのほか、資料収集に努めた結果、以下の本や冊子が出版されていた。

スリン県全体を概説した本とスリン県内の地方を紹介した概説書がある。スリン県全体の本としては、*sun watthanatham cangwat surin, watthanatham lum mae nam mun: karani khmer lao suwai surin, 1990 (2533)*がある。地域史には、*Thiraluk wanpet rongphayaban sikhraphum, sikhraphum 1982-1983 (2525-2526)*, 30 April 1983 (2526). というシーカラブーム郡の地域史などがある。岩田慶治が1971年に、クワイ語やクワイ人など多くの言語と民族の分布をインドシナ半島全体で著した『東南アジアの少数民族』はたいへん参考になる。また、クワイ語やクメール語を含めてタイ全土の言語分布を著した William A. Smalley の *Linguistic Diversity and National Unity: Language Ecology in Thailand*, The University Press of Chicago, 1994、もタイ国内の言語分布について把握するうえでとてもすぐれている。

博士論文でクワイ人を扱ったものがあるので、それに目を転じると、1998年にハーバード大学に提出された Komatra Chuengsatiansup 氏の *Living on the Edge: Marginality and Contestation in the Kui Communities of Northeast Thailand* と、2008年にマハーサーラーカム大学に提出された Wilat (ウィラート・ポティサーン) 氏のクワイ人の信仰についての *The Adaptation of the Kuy People to a Multicultural Context in Southern Isan* がある。

郡や村レベルで出版されている冊子には各地に詳細な内容の本がある。私がチョンプラ郡を歩いて収集した限りでは、チョンプラ郡ムアンリン行政区に *Krong kan fhunfu chumchon thong thin (klum cagwat watthanatham phasa) sathaban watthana onghan cumchon (Po O Cho) onghan mahachon doi sun prasat gan onghan chumchon tambon muang ling amphoe chomphra cangwat surin 32180, 2550(2007), Phum panya thong thin: tambon muang ling amphoe chomphra cangwat surin.* などがある。これは、ムアンリン行政区の村レベルの冊子には、ムアンリン行政区のなかの一行政村が出版した当該地区の計画書や紹介用の冊子がある。

## 2. 研究の目的

これまでタイ人やラーオ人が主として研究されてきたが、クメール人やクワイ人の研究はきわめて少なかった。そこで、10年ほど前から東北タイ南部のクメール人の研究をして明らかにしてきた。しかしまだクワイ人の研究が残っているため、クワイ人の家族と村落を対象にして研究した。なぜなら、家族と村落が社会生活のなかで基礎的構成を成しているため、それらを主たる対象として取り上げた。スリン県内のクワイ人が居住する一地区を対象に調査をおこない、家族と村落について実証研究をおこなう。

## 3. 研究の方法

タイ在住のクワイ人に関する文献と論文を収集した。また、クワイ人自身が伝承に基づいて作成した文献を現地で収集するとともに、広域に聞き取り調査をしてクワイ人の分布状況について把握した。そのほか、ある1つの地区を対象にして家族の悉皆調査をおこない、村落に関しては質的調査法に基づき聞き取り調査をおこなった。また、儀礼や日常生活の理解は参与観察法を用いた。

## 4. 研究成果

調査結果は、家族形態や村落形態でタイ人やラーオ人、クメール人などと異なる側面はほとんどなかったが、信仰面で彼らと異なる固有な側面があった。それは、天霊信仰がみられず、自然のなかに精霊を見る見方をしてきたことである。

はじめに移住してきた経緯を記すと、チョンプラ町はクワイ人がラオスのチャンパサック地方から移住してきたという伝承がある (muang ling)。1657年にチャンパサックからクワイ人がスリンに移動してきた。6名の代表者が引き連れてきた。現在のスリン県でいうと、1人はサンカ郡、1人はラムドゥアン郡、1人はラッタナーブリー郡、1人はチョンプラ郡、1人はスリン市、ほかの人はナコンシータマラート県ピマーイ郡、シーサケッド県クーカン郡にそれぞれ移住してきた。

チョンプラ郡の構成からみていく。9つの行政区 (タンボン) から構成されている。このうち、第1行政区のチョンプラは5つの地区から成るチョンプラ町とそれ以外の行政村から成る。チョンプラ町は1999年にスカピバーン (衛生区) からテーサバーン・タンボン (町) に変わった。テーサバーン・タンボンは法律上、人口が5万人以下の都市であり、ここでは町と称することにする。

チョンプラ町には町長 (ナヨック) が1人いる。4年ごとの選挙で選ばれる。副町長 (ローンナヨック) が2人いて、町長が任命する。

町議員は 12 人いて、4 年ごとに選挙で選ばれる。ムー 1 と 13 で 6 人、ムー 4・5・6 で 6 人と定員が決められている。2000 年と 2004 年に町長選挙と町議会議員選挙があった。町長の収入は 2 万バーツ、町議会議員は 8,500 バーツである。プラス、報酬が 1 日に付き 250 バーツある。町議会を構成する政党は次の 2 つある。連帯チョンプラ (klum chomphura samaki) というグループが 1994 年に結成されている。それ以外には、2003 年の選挙時に結成された klum pithi rup chun がある。それぞれ 6 名ずついる。

そのほか、チョンプラ行政区、通称 O Bo To には委員長が 1 人、副委員長が 2 人、書記が 1 人いるほか、職員が 8 人、臨時雇いの職員が 5 人、O Bo To は 28 人から成っている。1 年に 4 回会議がある。

チョンプラ農業協同組合 (サハコン・カンカセート・アンブーチョンプラ) がある。これは、1976 年に 141 名で発足した。1996 年 599 名、2006 年 1,592 名の会員がいる。年のときに、臨時雇いの職員が資金を持ち逃げした。

農業・農協銀行 (To Ko So) は葬式組を 1990 年につくった。50 バーツが維持費、葬式 1 回につき 20 バーツ支払う。1,300 人いるので 26,000 バーツもらうことになる。

現在、担保がない場合は 5 万バーツまで貸す。15 万バーツ 3 年間借りられる。利子は年間 10.50% で、返すときは 1 年に 5 万バーツずつ返してよい。

以下、調査地区の家族のようすについて記すと、スリン県チョンプラ町ムー 13 のシーバンドン地区では世帯数の増加が見られた。1983 年からの増加傾向をみると、2007 年までの合計で 97 戸増えている。その間、数戸ずつ増加し、なかでも 2006 年が一番多く 10 戸増えている。

2003 年の家族登録数 159 戸であったが、2006 年の家族登録数 171 戸に増加した。2003 年には総人数が 812 人であり平均世帯人数は 5.11 人であったが、2006 年には総人数が 785 人であり、平均世帯人数は 4.59 人と減少した。ただし、これは家族登録上であり、じっさいに居住している人数の数値ではない。出稼ぎなどのため、家を離れて住んでいる人がたくさんいる。出稼ぎ者は毎月帰ってくる人もいるし、年に 1 回しか帰らない人もいる。しかし、彼らは家族登録は移動していないことが多い。選挙があること、また手間がかかることという 2 つの理由が主たるものである。村長選挙・町長選挙・県議会議員選挙・国会議員選挙など、選挙のたびに多くのお金が入るし、また誰が当選するかということが大きな意味を有しているからである。

調査対象世帯数は 169 戸、596 人が住んで

いた。平均世帯員数は 3.5 人、142 戸、年長者の平均年齢 56.8 歳、515 人いたので平均世帯員数は 3.6 人であった。この数値は家族登録の数値とは異なる点に注意したい。跡取りがいる世帯は 87 戸、そのうち娘が親と同居しているケースが 60 あった。家屋構成は、核家族が 79 戸 (55.6%)、直系家族が 15 戸 (10.6%)、複合家族が 48 戸 (33.8%) であった。

次に、地区の開発の経緯について記す。チョンプラ町が幼稚園 (スーンデック) を 2006 年に建設した。教師は 4 人、全員臨時雇いである。児童数は 50 名、幼稚園の建設費に 2,109,000 バーツ要した。前の道路舗装に 235,000 バーツ要した。ある人は、この幼稚園に子供を通わせているが、月 1,500 バーツ支払っている。ここは 3-4 歳児のみで、5-6 歳児は小学校併設されている幼稚園に移る。2005 年に SML (行政村の規模に応じて政府からもらった資金、通称 SML と言う) として 25,000 バーツもらった。この資金で 2006 年に協同店 (サティカン・タラード、通称サハコンと呼んでいる) をつくった。以前、1987 年に協同店をつくったが、これは 1 年で崩壊した。その後、しばらくそのままの状態が続いたが、この SML の資金で再度協同店を再興することにした。

再興された協同店が始まったのは 2006 年 11 月で、その当時の組合員は 71 人であった。1 株 100 バーツで 190 株の約 19,000 バーツ集まった。売り子は毎日商品を市場で購入する係をしており、月 1,500 バーツの賃金をもらっている。会計検査係は 2 人いるが、いつも 1 人だけが会計検査をしており無報酬である。協同店の運営委員は 13 名いる。そのうち男子は 5 名、女子は 8 名いる。ちなみに隣のムー 1 は SML で米銀行を建設した。

女性織物会 (klum satri tho pha) が 2001 年につくられた。現在メンバーは 17 名いるが、活動はあまりしていない。足拭きマット組合 (klum pha chet tao) が女性の有志 10 名で 2006 年につくられたが、2007 年には活動を停止している。その理由は、売れないからである。販路をみつけられないことなど、流通関係の問題がある。参加している世帯番号は 13, 17, 33, 70, 99/1, 106, 125, 127, 128, 135 である。親族や親しい友人、近隣といった間柄にある。初めに 1 人 1,000 バーツずつ出して研修を受けた。教える人はラッターブリーから来た。1 日 2,000 バーツで 3 日間教えた。市場では 1 枚 20 バーツで売り、この村では 1 枚 15 バーツで売っている。その後、2008 年には活動が停止されている。その理由は、販路が確保されていないため作っても売れないためである。

2004 年の町長選挙には立候補者が 4 人いた。2006 年に村長選があった。男性と女性

の2人が立候補者し、女性が当選した。2008年に村長が町議会議員選挙に出たため村長を辞任した。そのため、2008年に村長選挙があった。3名立候補し、そのうち40歳代の女性が当選した。

次に、チョンプラ町にある Full Gospel Church について記す。この教会を主催するのは北欧の女性である。ここには1990年に来た。スリン県には同教会が6カ所ある (Ratthanaburi, Srikaraphun, Surin, Sankha, Chomphra, Tatun)。チョンプラ町にある教会では、毎週日曜日に礼拝がおこなわれており、毎回集う人はおよそ50名である。スリン市から教会関係者が来るほか、遠くは象村のあるタートゥン郡から教師が10人から20人ほどの子供たちを連れて参加している。

人びとは病気が治るといふ評判を聞くと、その人のもとにおしよける。この光景は、タイのどこでも見ることができる。ここクイー人が住むチョンプラ市でも例外ではない。キリスト教を信仰するにいたった理由もまた同様である。

キャンディを売り歩いていた人は、売り上げが悪かった。頻りに酒を飲んでいたのである。そこで、ある日、願を賭けた。キャンディがすべて売れたらキリスト教を信じようと。そう願を賭けて売り歩いたら、あっという間に売り切れてしまった。かくして彼はキリスト教を信じるようになった。およそ10年前のことであるという。彼は家族員にキリスト教を勧めて、一家全員がキリスト教徒になった。

こうしたキリスト教の信仰はたいへん興味深い。クイー人はラーオ人やクメール人など一緒に居住している異民族の文化の影響をたいへん受けてきた経緯がある。クイー人がキリスト教という異文化の信仰がどのようにして浸透するのかを調べることはたいへん興味深いからである。

高等教育進学率の上昇は市民社会にいたるための重要な手段である。そこで、学校の進学状況についても調査した。ここには概略だけを記すと、チョンプラ町近くの農村にある小学校の中学校への進学率は66.2%で、中学生の高校・職業学校への進学率は66.4%であった(2006年)。チョンプラ町にある高等学校から大学・職業学校など高等教育への進学率は、2006年で60.6%であった。

比較のために、スリン県プラサート市にある中等学校の進学率を2005年の時点でみよ。中学校から高校・職業学校への進学率は78.0%である。高校から大学・などへの進学率は57.7%である。この数値がごく普通の市や町のケースに見られることが分かる。こうしたことから、大学等への進学率が地方でも高くなっているようすがうかがえる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

Yasuyuki Sato, Ethnicities in Transnationalized Thailand: Cultural Characteristics of the Thai-Khmer and the Thai-Kui, *Surindra Journal of People and Society in Local Culture*, 査読有, Vol.1. No.1, 2009, pp.1-13.

[学会発表] (計 1 件)

Yasuyuki Sato, Ethnicities in Transnationalized Thailand: Cultural Characteristics of the Thai-Khmer and the Thai-Kui, The 10<sup>th</sup> International Conference on Thai Studies, 2008年1月10日, タンマサート大学(タイ国バンコク)

[図書] (計 1 件)

佐藤康行, 『タイ農村の村落形成と生活協同—新しいソーシャルキャピタル論の試み』, めこん, 288頁, 2009年2月

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

佐藤 康行 (SATO YASUYUKI)  
新潟大学・人文社会・教育科学系・教授  
研究者番号: 40170790

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし